

〔書 評〕

中村泰三著

『現代のソビエト世界』

谷 江 幸 雄

1

現代ソ連に関するユニークな研究書がこのほど、地人書房から出版された。著者は大阪市立大学文学部教授で、サウシキン著『ソビエト工業地理』（ミネルヴァ書房）の邦訳等ソビエト経済地理研究の分野で活躍されている。

本書は、「ソ連の隣に位置するという地理的位置を認識して、相手を理解する努力が、わが国民に求められる」（「はしがき」）との問題意識から、現代ソ連の実態を社会・経済地理学の方法にもとづいて多面的に分析しようとしたものである。

著者は、「わが国では、ソ連の紹介は主として歴史、政治、経済分野からのアプローチによりなされてきた。そのためソ連をロシア帝国の継承者として、ロシア人を中心に、また、資本主義経済と異なる社会主義経済の特色などに研究の重点をおいてきたように思われる。しかし、広大な領土と多様な自然、また、そこにロシア人以外の多数の民族が居住するという国がらは、それ自体一つの世界であり（本書のタイトルが『現代のソビエト世界』とされた所以——評者）、上記の諸分野からの紹介、研究だけでは必ずしも十分ではない」といい、「多様なソ連を地域的ひろがりにおいてみる視点」の重要性を強調している（同上）。この点、私も全く同感である。私の属している社会主義経済学界での論争問題——現代社会主義の発展段階論、社会主義的所有論、集権化と分権化、社会主義経済における「計画と市場」の問題、経済改革の評価、農業問題等——を検討するさいにも、こうした視点もしくは地域経済論的な分析手法がもっと重視されてよい。その意味で本書は、社会主義経済研究等他分野のソ連研究のあり方に対する問題提起の書ともなっている。

本書の構成は次のとおりである。

はじめに

- 第1章 ソ連邦の自然環境——地形——
- 第2章 ソ連邦の自然環境——気候——
- 第3章 地理的条件・位置と歴史的背景
- 第4章 ソ連を形成する種々の民族
- 第5章 人口構成の地域性
- 第6章 人口移動からみた地域性
- 第7章 農村集落の変化
- 第8章 ソビエト都市と都市問題
- 第9章 自然資源とその開発
- 第10章 工業配置と工業の地域的發展
- 第11章 農業生産の地域性
- 第12章 林業と水産業
- 第13章 サービス業・商業の地域性
- 第14章 ツーリズムの發展
- 第15章 ものとの動き
- 第16章 環境問題
- 第17章 シベリアの開発
- 第18章 地域の發展と生活水準の地域差
- 第19章 ソ連とセフ(コメコン)
- 第20章 ソ連と先進資本主義国・第三世界
- 第21章 各地域の特性

まず第1章では、ソ連の地形概観に続いて、平原、丘陵・台地、山地、河川について、それぞれ詳しい説明がおこなわれている。

第2章では、ソ連の気候概観に続いて、ソ連ヨーロッパ部、シベリア、中央アジアの気

候、植生からみた特性が明らかにされている。

第3章では、ソ連の地理的特性がこの国に与える影響、その地理的条件・位置と歴史からもたらされたソ連の政治システムの特徴および基幹民族としてのロシア人の民族性が明らかにされている。氏はソ連の大きな地理的特性の1つとして「侵入に対する自然の防備の欠如」（ロシア平原の単調さ、川岸の特性など）と強い隣国の存在をあげ、「こうした状況は、ロシア、また、現代のソ連が侵略的国家であるという一般のイメージとは逆である」という。すなわち「ロシアは絶えず隣国、特に、西側の国々からおびやかされてきた」し、現在も「西欧諸国、NATO加盟国のトルコ、中部アジアのパキスタン、東アジアの中国、日本が西から東に連なってソ連を取りまき、北は北極海をはさんでアメリカと対峙する状況は、ソ連にとってかつてのロシア以上に、強力な諸国によって包囲されていると感じている」のであり、「この状況下で、包囲諸国の分断、軍備の増強を考えるのは、ソ連にとって当然の措置であり、アメリカと西欧諸国の結びつきを弱め、そして中国とは和解を進めるという政策をソ連が重視するであろうことは容易に推測できる」と述べている（37—38ページ）。この指摘は、今日の米日支配層による意図的なソ連軍勢力脅威論と関連して、非常に興味深い。

第4章では、地理的観点からみたソ連の主要民族の分布とその特性、民族別人口増加とソ連の対策がとりあげられている。

第5章では、ソ連の人口増減、人口の再生産、年齢構成と労働力・就業構成、教育水準の地域的特性が明らかにされている。ソ連では現在、人口増減と人口再生産において著しい地域差がみられるという。

第6章では、人口移動の概観に続いて、大経済地域間の人口移動と農村から都市、都市への通勤・通学をとりあげ、人口移動からみた現代ソ連の特性が明らかにされている。

第7章では、ロシア革命以後の農村集落や民家の変化、集落編成計画の歴史がとりあげられる。

第8章では、第1次5カ年計画以来の工業化政策による都市の発展状況、都市の配置や成長抑制政策、都市の内部構造が明らかにされている。

第9章では、地域別にみた資源分布の総合的評価に続いて、鉱物資源、燃料エネルギー資源の分布とその開発問題がとりあげられる。

第10章では、「革命後の工業の発展は、一国社会主義の選択を余儀なくされたなかで、

農業部門の犠牲下になされたとしても、めざましいものがあり、ソ連各地に多数の工業都市が生れた」(114ページ)との認識に立って、「このような広範に発展した工業について、経済地理的観点から検討」(同)している。そのさい、ここでは特に工業配置の原則、工業生産の地域別変化とその問題点が考察されている。

第11章では、多様な姿をもつソ連農業の地域性が明らかにされている。農業生産の地域的特色、農業に不利な自然条件、収益性からみた地域差、畜産、農工コンプレックス、灌漑地域の発展、副業的農業の各節からなっている。

第12章では、わが国と密接な関係のあるソ連の林業(毛皮生産を含む)と水産業の実態が明らかにされている。

第13章では、第14章の「ツーリズムの発展」とともに、従来わが国の地理学でほとんど紹介されなかったソ連の商業を中心に、生活物資の供給問題がとりあげられている。

第14章では、近年、特に1960年代以降における実質賃金の上昇、労働時間の短縮による余暇の拡大、週休二日制の実施、有給休暇の増加と関連して発展してきたマスツーリズムについて、その展開、問題点が明らかにされている。

第15章では、広大な国土をもつソ連にとってきわめて高い重要性をもつ輸送問題——貨物輸送と旅客輸送——がとりあげられている。

第16章では、ソ連の環境破壊の現状、その発生原因、環境保全対策等がとりあげられている。著者は、自らの訪ソ体験やカマロフ(邦訳『シベリアが死ぬ時』の著者)らの研究によって、「大都市の大気汚染、河川、湖沼の水汚染、鉱業、農業活動による土地、土壌の破壊など世界各地で発生している環境破壊は、ソ連邦でも生じて」(189ページ)おり、「1977年現在、ソ連で145万km²、全国土の人間にとり、有用な面積の10%が、産業により砂漠や、半砂漠になっている」(190ページ)とし、その発生原因として、ソ連の経済成長優先、国防力の強化政策、技術水準の立ち遅れ、法令遵守観念の希薄さ、住民運動などのチェック機構の不在などをあげている。

だが、私の二度の訪ソ体験からしても、著者の現状認識にはただちには首肯できない。ソ連でも環境破壊や公害が一部発生していることは事実であるが、生物学者の宇佐美正一郎氏も指摘しているように、「ソ連では環境の問題は、公害というような人間生活に脅威を与えるような深刻な問題としてではなく、自然の破壊を注意して防止するという自然保護に中心的な課題があり、その方向への努力がなされている」と思う(宇佐美正一郎「公

害と自然保護——日本とソ連——』『日ソ経済調査資料』第574号，1980年，9ページ）。昨年夏，著者らと共に訪ソしたとき，モスクワやキエフなどの大都市を訪れたが，東京や大阪に比べるとはるかに緑も多く空気も清浄であった。

第17章では，種々の点で日本と関連の強いシベリア・極東地方について，その近年の発展，開発状況とその問題点および日本との関係が明らかにされている。著者は本章末尾で，「現状では，ソ連経済の不振，シベリア開発の緊急性から，ソ連側が積極的にわが国との交流を考えているが，わが国も資源確保，隣国であるソ連との友好維持，また世界の平和維持の立場から，開発に協力する方向に進むのが有利な選択と思われる」（213ページ）と述べているが，私も全面的に賛成である。

第18章では，ソ連全体として歴史的にみた場合，各地域の経済・生活水準の向上，平準化傾向がみられることを確認したうえで，現在のソ連において経済・生活水準の地域差がどの程度存在しているかを明らかにしようとしている。

第19章では，現代世界のなかで一大勢力となっているセフ（コメコン）内でソ連の占める位置と役割，国際分業による生産配置への影響が明らかにされている。

第20章では，最近の東西の軍事的対立にもかかわらず，東西の経済的結びつきが緊密であるが，このことを貿易，技術の交換，産業協力，西側の東側へのクレジット供与，さらに近年発展の著しいソ連商船隊の動きを通して明らかにしようとしている。

終章（第21章）では，以上の各章で述べられてきたソ連各地域の諸特性を総括的に図示している。著者は，国民所得，人口流入出，工業発展水準，農業発展水準，交通発展水準，1人当たり小売販売高の6つの指標を用いて，26の経済地域の各特性を図化している。著者は，こうした図化によって，各地域の特色，社会・経済発展水準の差異を一目で識別することに成功している。ただ惜しむらくは，ここで用いられた資料がいずれも1970年前後と，やや古いことである。

3

以上にみたように，本書は，ソ連の自然環境，民族・人口構成から産業の地理的展開，そしてシベリア開発や対外経済関係にいたるまで，現代ソ連で生じている実際的な問題を社会・経済地理学の立場から多面的にとりあげ，しかも従来のソ連研究の成果をふまえ

て学問的にも相当突っこんだ分析を行っている。ここに、類書にみられない本書の一大特徴がある。

また、地理学書ということで当然かも知れないが、すべての章の解説に豊富な図表（図62、表39）を駆使していることは、難しい専門用語を避けて分かりやすい文章にしていることと合せ、一般の読者にとって親切といえる。

わが国で感情的なソ連評価やソ連軍事力脅威論がジャーナリズムを中心に広く行われている現在、現代ソ連の実態について、そのプラス面とマイナス面の両面を多くの事実と科学的な視点にもとづいて観察しようとしている本書の意義は大きく、注目されるべきであると思う。

（地人書房、1983年3月、A5判、259ページ、定価3300円）